

デイ・ブレイク

mono0519

柱に掛けられた丸い時計の短針が「7」を指そうとしていた。

俺は同僚に見られないように、机の上に置かれたデスクトップPCのケースに隠れてため息をつく。

入社して早8ヶ月。定時に仕事を終えて帰れないことにも慣れた。社会人の大変さ、時間のなさに最初のうちは戸惑い不満にも思っていたが、不思議な物でそんな生活を続けているうちに環境に適応してしまうものだ。今ではなんとか時間を見つけて、趣味に費やすこともできるようにもなっている。

だが、そんな俺でも今日ばかりはため息をついてしまう。

今日は12月24日。

そう、世の中はクリスマスイブという日だ。

街を往くカップルが浮き足立って見えるこの日、誰もが何となくそわそわしているこの日に俺は普通に仕事をしているのだ。

そこまでは別にいい。彼女のいない俺にとっては関係のない話だ（寂しい話はあるが……）。しかし問題は別にある。

今日は金曜日。週末である。

俺はちらっと上司の席に視線を向ける。

上司は忙しそうに書類やディスプレイを見ていた。

俺はまたため息をつく。

上司からの粋な計らいとして「今日は定時にあがってよし！」というクリスマスプレゼントをほんの少しだけ期待していたのだが、この分だとそれは無いようだ。

そんなことを考えていたからだろうか。目の前のディスプレイがスクリーンセーバに切り替わってしまった。急な画面の切り替えに、物思いに沈んでいた意識は急浮上し、作業が全く進んでいないことに気付く。

再び時計に目をやると長針が「10」を過ぎたところだ。

そろそろ定時。

今日も残業決定のようだ。

俺は今日何度目かわからないため息をついていた。

ガタッ。

そんな物音が聞こえたのでそちらに目をやると、なんと上司が席から立ちあがっていた。俺の鼓動が早くなる。本当にサプライズがあるのか？ちょっと本気で粋じゃないか。

俺は期待のまなざしで上司を見やる。同僚達も何事だと上司の方へ視線を向けているようだった。

上司の一挙手一投足に俺の全神経が集中する。ごくり、と唾を嚥下する音がやけに大きく聞こえた。

そして上司は勿体ぶるように皆の顔を眺めてから、ついに口を開いた。

「暖房、暑くない？」

ずるっ、と自分のスーツがズレるのを感じた。

上司席近くの女子社員が慌てて空調を操作しに席を立つ。そんな光景を遠目に見つつ、俺は「ですよね」と心の中で呟く。期待してしまった分、その反動も大きい。

ため息もそこそこ、俺は上司から自分の机に視線を戻す。マウスを動かし、スクリーンセーバを解除した。ディスプレイの隅にあるデジタル時計は「18:59」を表示していた。

あと1分。

俺はその表示が「19:00」に切り替わるまで待つことにした。定時を過ぎるのを目の当たりにして、現実に向き合おうと言う魂胆だ。すこし自嘲気味だろうか？まあ、気にしてはいけない。

そして数秒経ち、数十秒経ったとき、デジタル時計の表示が切り替わった。

『19:00』

その表示が目飛び込んできた瞬間、ふっと表示が暗転した。

何かを考える前に、女子社員の悲鳴が耳に飛び込んでくる。続いてざわざわと話し声が聞こえ始め、誰かが大声をあげた。

停電——だろうか？

目に『19:00』の表示が残像として残っているのを感じつつ、辺りを見渡す。社内のあらゆる光が消えていた。窓から差し込む明かりだけが唯一辺りを照らしている状態だ。

不安に煽られ、胃が口から飛び出そうなのを我慢し、必死で状況を整理しようとする。だが次の瞬間、背中に寒い風を感じ、俺は思わず振り返っていた。

振り向いた先には窓があり、そしてそこから差し込む明かりをバックに何者かが侵入しようとしていた。逆光で顔がよく見えない。

俺の動揺などおかまいなしに侵入者はあっという間に社内に入り込み、そして近くにあった空の机に乗ると、両手を上げた。

そして——

「メリィiiiiiiiiクリスマスあああああスっ！！！」

真っ暗な社内に陽気な老人の声が響き渡った。

しん……、と一帯は静まり返る。

怒濤の展開に俺は考えるのを放棄し、机に乗った人物のシルエットをただただ眺めていた。恰幅のいいその影は周りの反応の悪さに何やら戸惑っているようだった。

「あれ？おかしいなあ……場所を間違えたかな？」

威厳のある老人の声で若々しい口調のつぶやきが俺の耳に届いた。ごそごと何かを取り出す音が聞こえ、そして影は「あ」と声を上げた。

「本当に間違えてた」

おい、と思わず突っ込んでいた。

影は頭に手をやり「てへへ、いけないいけない」とでも言うかのように乗っていた机から降りた。

しん、と静まり返っていた一帯は徐々にざわめきを取り戻しつつある。どこかから「今の声は誰のものだ？」と言う声も聞こえた。

そんな状況の中、その影は俺に気付いたのか近づいてくる。

「あ、お兄さん、せっかくだしこれあげるよ」

訳もわからず俺は手渡された物を受け取る。それを確認してすぐ、影は侵入してきた窓へと足を掛けた。

俺は何の考えもなしに声をかけていた。

俺の声にその影は俺へと振り返る。相変わらず逆光で顔がわからない。だが雰囲気は伝わってくる。

笑っていた。

「メリークリスマス」

クリスマスは明日だろ、という言葉が掛ける前に影はいつの間にか消えていた。

そして次の瞬間、社内に光が戻った。

俺はぼさっと突っ立ったまま、受け取った物を見る。綺麗に包装された箱だった。

そして改めて社内を見渡すと、上司が忙しそうに社員に向けて指示を飛ばしていた。データは飛んでいないか、案件に支障はないか、停電の原因はなんだ、……。

俺は再び箱に目を戻す。リボンの付けられたふたは包装を解かなくても開けることが出来そうだった。俺はふたに手をかけ、ゆっくりと外す。

中身は空っぽだった。

ふっと笑いが込み上げてくる。

相当な慌て者なのだろう。場所も日にちもプレゼントもどれも失敗してるじゃないか。

俺は空っぽの箱を机の上に置くと、机の下に置いてあった鞆を取り出し、椅子にかけられたコートに羽織った。

それを見ていたのか上司が声をかけてくる。

「君、なにしてるんだ！」

「定時過ぎたのであがらせてもらいます」

「あ、ちょっと、おい！」

俺は慌ただしい社内を背にし、タイムカードを切った。

タイムカードに刻まれた時刻は「19:03」。

今日俺はサンタからささやかなプレゼントをもらった。